

建物の見どころ

旧師団長官舎は、木造2階建の洋風建築で、1階は公的な空間として洋風に、2階は私的な部屋として和風に造られています。当時は、このような1階が洋室、2階が和室の和洋折衷の構造を「長岡式」と呼んだと言われています。

外観の意匠は、師団長の威厳と存在感を演出するためか、左右対称でない住宅としての間取りでありながらも、正面を妻入の形式で表現しています。

1階の婦人・男子応接室、書斎の壁は色漆喰で仕上げられています。各室とも、天井には意匠の異なる中心飾りがあり、シャンデリアが吊るされています。

また、窓枠には瀟洒なカーテンボックスが取り付けられ、全体に落ち着いたデザインですが、ホールや男子応接室、廊下の意匠は派手で、特にメタル打ち出し天井にそれが良く反映されています。

2階は、床の間付きの座敷と居間からなる和室となっています。



外観



天井飾り（婦人応接室）



書斎



和室（2階）

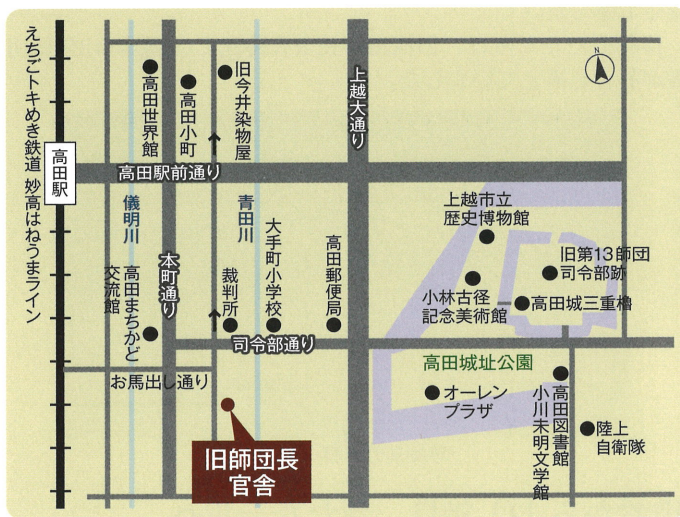
施設情報

- 公開時間 午前10時～午後5時
- 休館日 月曜日（休日に当たるときはその翌日）
休日の翌日
12月29日から翌年1月3日まで
- 入館料 無料

所在地・問い合わせ

〒943-0833 新潟県上越市大町2丁目3番30号

旧師団長官舎 TEL 025-526-5903



※←は一方通行

- アクセス — 鉄道でお越しの場合 —
えちごトキめき鉄道
「高田駅」から徒歩約20分

- 車でお越しの場合 —
北陸自動車道「上越IC」から約20分
上信越自動車道「上越高田IC」から約10分

- 駐車場 旧師団長官舎駐車場（9台）をご利用ください。

発行 上越市 文化振興課

上越市文化財

旧師団長官舎



令和5年3月

— 高田の人々と共に生きる 明治期の洋風建築 旧師団長官舎 —

旧師団長官舎のあゆみ

軍都・高田

明治37年(1904)、日露戦争が始まると軍備拡張のため、師団の増設が計画され、第13師団は信越地方に設けられることになりました。明治維新後、越後国(現新潟県)の都としての地位を失っていた当時の高田町は、「軍都」としての再生を目指して誘致運動を展開しました。熱心な運動は実を結び、明治40年(1907)9月に誘致が正式に決定しました。

陸軍第13師団の入城

第13師団の施設は、高田城跡を中心に建設工事が進められ、司令部庁舎は、本丸跡に置かれました。この時、極楽橋(木橋)を土橋に替え、二ノ丸や三ノ丸の土塁を崩すなど城跡の地形の改変が行われました。そして、明治41年(1908)11月、待望の第13師団が高田へ入城しました。入城時、師団長官舎は未完成だったため、岡崎生三第2代師団長は寺町の本誓寺を宿舎としました(後に、現在地(大町2)へ純和風の官舎を建設)。

師団長官舎の建設



男子応接室(当時)

明治43年(1910)6月、岡崎師団長に代わり、長岡外史中将が第3代師団長に就任しました。しかし、岡崎前師団長が病気で高田に留まったため、新たに、高田中学校(現高田高等学校)西側に外史の邸宅として「師団長官舎」が建設されました。

設計は陸軍の加藤栄太郎、施工は西頸城郡能生町(現糸魚川市)の高島組が請け負いました。外史はヨーロッパでの生活経験を生かし、それを設計に反映させました。当時の高田日報は「其美観実に見物なり」と紹介しています。

第13師団の廃止から現代まで

大正14年(1925)4月、軍縮により第13師団は廃止されましたが、高田にはその後も歩兵第15旅団司令部が置かれ、軍都の体面は保ちました。師団長官舎は「旅団長官舎」となり、また、戦後は陸上自衛隊高田駐屯地の幹部宿舎として平成3年(1991)まで使われました。

そして、平成5年(1993)に、明治期の貴重な洋風建築を保存するため、市が現在地に移築・復原し、翌6年1月に市文化財に指定しました。

移築したところは、旧高田市長公舎跡地で、岡崎第2代師団長が官舎を構えていました。



移築前の外観(背面)

建設から111年目、新たな一歩へ

市では、地方創生の取組として、文化財の保存と更なる利活用を図るための改修工事を進め、令和3年(2021)4月から、これまでの建物見学に加え、文化財としての趣をいかしながら、民間事業者によるレストランとしても利活用しています。



男子応接室

長岡外史と日本のスキーの始まり

長岡 外史 (1856~1933)



現在の山口県出身。陸軍大学校を卒業し、大本営参謀次長等を経て第13師団長に就任しました。その間、約3年に渡りヨーロッパに派遣され、北欧を視察した際、スキーと出会いました。外史は、軍事だけでなく雪国の住民の暮らしの向上のためにスキーを導入することが大切だと考えていました。

スキーの普及のほか、日本の航空の発展にも力を注ぎ、民間航空の父ともいわれています。「プロペラ髭」と呼ばれる長い口髭がトレードマーク。師団長官舎では、妻や5人の子どもたちと暮らしていました。

テオドール・エドラー・フォン・レルヒ (1869~1945)

当時のオーストリア・ハンガリー帝国の軍人で、軍事視察のために来日しました。リリエンフェルト式スキー術(一本杖スキー術)の創始者ツダルスキーの弟子で、高田に滞在中、熱心にスキー指導を行いました。帰国後も、上越の人々との交流は続きました。



日本のスキーは上越からはじまった

明治44年(1911)1月12日、レルヒにより日本で初めての本格的なスキー指導が高田で行われました。

その発端には、ヨーロッパ留学でスキーの重要性を理解していた外史と、スキーを特技としたレルヒという2人の運命的邂逅がありました。

それから1か月後には日本最初のスキークラブ「高田スキー倶楽部」が結成され、スキーは市民の体育向上と民間への普及につながり、ひいては現在のウィンタースポーツの礎が築かれました。

指導の中心となった金谷山には、日本スキー発祥80周年を記念して建てられた「日本スキー発祥記念館」があります。



練兵場でのスキー訓練